

## 外国にルーツを持つ若者のコミュニティづくり

### glolab の実践から

柴山智帆

glolab 共同代表

#### 1. はじめに

筆者は 2017 年に都立高校教員が中心となって実施した「外国にルーツを持つ高校生のための進路ガイダンス」<sup>1</sup>に実行委員として参加した。このキャリアガイダンスは、外国からさまざまな事情で来日し、高校生となった若者が自身の高校卒業の進路を考えることを目的に開催されたものである。外国にルーツを持つ高校生が、学校の枠を超え集い、同じような体験をした社会人や大学生とともに自分の未来を考える機会を作った。

筆者は、このようなガイダンスに加えて、若者ひとりひとりと向き合い寄り添いながら、成長を後押しする継続的な活動も必要ではないかと問題意識を持つようになった。そこで、共に実行委員として参加し共通の課題認識をもった K とともに、若者の成長を後押しするために伴走する活動を開始した。これが任意団体 glolab の設立の経緯である。

当団体は、来日後さまざまな壁にぶつかりながら成長をしていく若者の可能性に着目し、こうした若者が集い学びあうコミュニティを作ることを目指している。本実践報告では、活動を通じて見えてきた課題を浮き彫りにし、今後のどのような活動をしていくのか方向性を述べる。まず、はじめに、第 2 章で外国にルーツを持つ若者の現状を明らかにする。第 3 章では、他団体の取り組みについて、第 4 章では外国にルーツを持つ若者の可能性について述べる。次に、第 5 章で、この 1 年間の glolab の活動を振り返り、最後に第 6 章で、これまでの活動を通して見えてきた課題を浮き彫りにし今後の活動内容について探り方向性を示していきたいと思う。

#### 2. 外国にルーツを持つ子ども・若者の進学・就職の壁

2018 年 6 月時点で外国籍人口は、約 264 万人であり、10 年前と比較して 23%も増加している。（法務省入国管理局<sup>2</sup>）そして、外国籍人口の増加に伴い、親の都合等様々な事情で来日する 18 歳未満の子どもたちも増加傾向にある。2017 年に文部科学省が実施した「日

本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査<sup>3</sup>」によれば、日本語指導の必要な児童・生徒は、43,947人にのぼる。10年前と比較して60%も増加している。このなかに日本国籍で、日本語指導が必要な児童生徒が、9,612人含まれている。この統計だけでは正確な増加率を断言できないが、日本国籍や外国籍に関わらず、外国で生まれ、幼少期や青年期に日本に移り住んだ子ども・若者の人口は増加していると推定される。

一方、文部科学省はこれまで、高校入学後の中退率や進路に関する調査は実施してこなかったが、「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 2018年度版<sup>4</sup>」で初めて高校生に関する実態調査が行われた。この調査によれば2016年度、日本語教育が必要な公立高校生の高校中退率は、9.61%にのぼる。同年度の全国の公立高校生の中退率は1.27%で、まさに7倍以上の割合で日本語教育が必要な生徒が中退していることになる。また、同省は日本語教育が必要な高校生の高校卒業後の進路についても調査している。2017年度卒業見込みの生徒のうち40%（全体は、4.62%）が非正規の仕事に就く予定があり、進学も就職もしない生徒が18%（同6.5%）にもものぼったことが判明している。また、進学率は、2016年度の公立高校生の進学率が71.24%に対し、2017年度、卒業見込みの日本語指導が必要な生徒の進学率は42.19%にとどまっている。

なぜ、こうした若者が、就職や進路の壁に直面しているのだろうか。まだ、推測の域を出ないが、筆者は、想定される原因は以下5点だと推察する。

- ①高等学校における日本語指導の不足
- ②外国にルーツを持つ生徒の背景に配慮した進路指導の不足
- ③保護者の進学や就職に関する理解不足
- ④ロールモデルの不在
- ⑤NPO等民間団体による支援の不足

まず、一点目の日本語指導に関して、義務教育である小中学校と比べて高等学校での日本語教育が不十分であるという課題がある。義務教育段階の日本語教育体制も充分とはいえないが、日本語指導が特別の教育課程と位置付けられたり、日本語指導が必要な児童・生徒が一定以上在籍すると教員が加配されたりするなど、以前に比べて、一定程度の制度の整備が進んでいる。一方、高等学校では、全国的にみて日本語教育の体制が整備されているとは言い難い。例えば東京都立高校で言えば、外国籍特別枠のある高校や外国籍生徒が多く在籍する一部の定時制高校には取り出し授業や外部人材による日本語指導があるが、日本語教育の専門的な知識や経験のある指導者が必ずしも行っているわけではない。また、

指導内容や日本語指導を実施している高校数や日本語支援が必要な生徒の包括的なデータもない。

第二に、高校での進路指導ではあるが、筆者が何人かの若者に高校での進路指導について聞き取りを行ったところ、外国にルーツを持つ生徒の事情に即した進路指導が必ずしも行われていないことがわかった。ある若者は、日本語が不十分なまま担任の日本語が理解できず、日本では卒業前に進路を決定するのが通常であることを理解したのが、進路未決定のまま高校卒業をした後だったと語っていた。これは極端な例かもしれないが、在留資格や日本語力などさまざまな課題に教員が必ずしも精通しているとは限らない。このような課題と生徒たちのポテンシャルなどを理解した上での進路指導が望まれるが、外国籍生徒が多く在籍している一部の高等学校を除き難しいのが現状だ。

第三に、保護者側の進路に関する理解不足という課題がある。日本で学校教育を受けていない保護者にとって、高校卒業後の進路に関して理解することは容易ではない。若者に聞くと、進路は自分で決めなさいと保護者から言われているものが多い。母国の社会や文化背景による価値観で子どもに意見をする場合もある。筆者は、これが原因で親子の間で軋轢が生まれるケースも見てきた。子どもたちの進路を心配し、サポートしたいと思ってもなかなかそれができない保護者も多い。

次に、ロールモデルの不在という課題である。若者の多くは、自分の意思ではなく、家庭の事情等で来日しているため、必ずしも夢や希望をもって来日しているわけではない。日本語の壁や、進学、就職の壁に直面し、不安に陥ったり将来の展望を描けなかったりすることもある。そういった若者に、同じような環境から、さまざまな壁を乗り越え進学、就職した先輩は貴重な存在だ。彼らや彼女らから情報を得たり、先輩の姿をみて将来の展望や目標を持ったりするとも可能だ。しかし、こうしたロールモデルと出会える場は現状ほとんど存在しない。

最後に、民間団体の支援不足について述べたい。文部科学省は、2019年度の新規事業に「外国人高校生等に対するキャリア教育等の充実<sup>5</sup>」を盛り込んだ。これは、高校やNPO等が中心となり、企業やボランティアなどの地域の関係団体等と連携し、外国人の高校生等に対する包括的な支援を行うものである。文部科学省が、上述の実態調整で明らかになった中退率や進路未決定率の高さに着目し、こうした新規事業を打ち出したことは、大きな前進である。しかし、一方で、現時点では、NPOなどの民間団体には、高校入学までの支援を中心に活動している団体が多いが、高校入学以降の若者をサポートする団体は、全国的に数えるほどしか存在しない。

### 3. 他団体の取り組み

成長を高校生以降のサポートは教育現場でも民間でもまだ少ないと上述したが、数は限られるものの、いくつかの団体がこの課題に取り組んでいる。その一つに、「NPO 法人 Mixed Roots ×ユース×ネット★□こんぺいとう」という団体がある。当事者である 20 代から 30 代のユースが中心になって立ち上げた団体で、「外国にルーツを持つ子どもたちが活躍できる社会づくり」を目的としている。

当団体にとって彼らの活動から学ぶことが多くある。例えば設立メンバーのマルセロらは、岐阜県の定時制高校のサッカー部に在籍し、働きながら高校に通う生徒たちに①現役大学生との練習試合と、②マルセロの定時制高校の高校生時代からの歩み、③日本の大学を見学し、進路・進学について考える場をつくった。（渡辺マルセロ 2011：49-50）

同じ道を歩んできたマルセロが、訪問した大学の教員であるということは、高校生にとって大きな意義がある。彼が、教員として勤務する姿を目の前で見ることができるし、職場である大学で彼の体験談や進路に関する話をきくことで、より具体的に自分の将来を考えることができるからだ。引率の高校教員からは、「自分と同じ境遇であった人に語ってもらいと説得力がある。生徒の目の色が変わるのを感じた」という声がよせられている。

### 4. 外国にルーツを持つ若者の可能性

これまで、外国にルーツを持つ子ども、若者が直面する壁や課題をさまざま述べてきた。しかし、これらの壁は彼ら、彼女らが成長する機会とも考えられる。glolab 活動開始以前より、K 自身の経験や筆者が接してきた若者を見てきた経験により 3 つの力があると推察した。

#### （1）積極的にコミュニケーションをとって相手を動かす力

日本語を学び、学校で母語ではない日本語で学習し、友人をつくる。独特な日本の学校文化の中で学校生活を送ることも、子どもたちにとっては、チャレンジングなことだ。ある若者は、日本の友達を作るのは部活だと考え、バスケット部に入りあえて先輩後輩の厳しい関係に身をおいて友達を作ったという。

#### （2）大変なことがあっても、あきらめないで最後までやる力

中学校 1 年生で来日した若者は、「まったく日本語がわからず、授業中ただ座っているのはとても辛かった」、「母国ではそれなりにできた勉強ができたのに、日本語がわからず授

業が理解できない」ことに、ショックを受け、「なにもできない人間になったようだ」と落ち込むこともあったと語っている。その「どん底な状況」から「日本語だけのせいで、できない人と思われたくない」と日本語の勉強を人一倍頑張ったと語っている。学校内での日本語のサポート体制が必ずしも整っていない中で、自分なりに工夫して日本語をまなび、日本語力を培っていったのだ。

### （3）問題を自分で考える力

前述のように外国からきた保護者は、日本での進路に関してはあまり知識がない場合が多い。進学や就学など保護者に相談することが難しければ、自分で情報収集し、自分の頭で考えなければならない。また、弟や妹の保護者代わりをするものも多い。このように、さまざまな問題に直面しながら、問題解決のため自分で考える力が自然に身についていくのではないだろうか。

この3つの力は得に最近経済界で強く求められている力だ。例えば一般社団法人日本経済団体連合会が発表した2018年度新卒採用に関するアンケート調査結果（日本経済団体連合会 2018）では、企業が新卒に求める力として1位が「コミュニケーション力」、2位が「主体性」、3位が「チャレンジ精神」があがっている。どれも、我々が外国にルーツを持つ若者が持っているのではないかと想定している力とおおよそ合致している。

必ずしも経済界が求めている力が、社会で必要な力とすべて合致しているわけではないと思うが、外国にルーツを持つ若者が、適切な支援を得て成長し、自立した大人として社会にでていけば、日本社会でも世界でも活躍する場が広がっていくのではないだろうか。

## 5. glolabの取り組み—実践の過程

### （1）活動開始から

「外国にルーツを持つ高校生のキャリアガイダンス」を開催後、筆者とKは、上述の外国にルーツを持つ若者のポテンシャルを引き出し、継続的にサポートできる場を作ろうとプログラムの企画に着手した。自身も外国にルーツを持つKは、「自分が高校生のとき、進路や将来について相談できる場がなかった。外国にルーツを持つ若者が集い、ともに学び合い成長するコミュニティを作りたい」という思いがあった。そこで、大学生が身近なロールモデルとして高校生の悩みを聞きながら進路をサポートし、さらに社会人が大学生を支援するプログラムを考案した。

そこで、まず、筆者がつながっている大学生10名ほどに声をかけ、大学生活を聞き取り

活動に興味がないかヒアリングを行った。ヒアリングを行った結果、経済的な問題や家庭の問題などさまざまな問題を抱えながら、学生生活を送っている学生が多かった。いきなり高校生のサポート役として参加する心や時間的な余裕を持つ大学生は少ないのではないかと考えるようになった。

そこで、サポート役を社会人に担ってもらい、若者を16歳から24歳までを対象としてプログラムを作ることとした。外国にルーツを持つ若者の参加者の年齢をひろげることで、年少の参加者が年長の参加者のなかに身近なロールモデルを見つけるかもしれない。大学生にサポート役を担ってもらうのではなく、一緒に活動するなかで、先輩が後輩をサポートする動きがでるのではないかと考えたからだ。

具体的な活動として、①自分の得意な事、苦手な事を洗い出す ②好きな事を洗い出す、③目標を見つける、④ロールモデルに出会う、⑤プログラムを通した学びを発表する、5つのステップを考えた。ヒアリングをおこなった大学生のうち関心をしめした3名がプログラムに参加することとなった。

まず、①の活動として、リンクアンドモチベーションの「モチベーション特性を把握しよう」というプログラムシートを使用し、どのような時にモチベーションがあがったり、さがったりするのか考えるワークショップを行った。このプログラムシートには、「決められたことを決められた方法で行うことを要望されたとき」、「これまでの見方や手法を否定されたとき」モチベーションがさがるかなどの設問がある。この質問に「はい」か「いいえ」で回答し、点数化していく。その結果に基づいて、新しいことを作っていくことが好きなのか、決められたことを丁寧に実行していくことが好きなのかなど自分の思考を把握できるしくみになっている。また、すでに制度が整っている大企業が好むのか、ベンチャー企業が好むのかということも客観的に知ることができる。

しかし、在日年数が数年の参加者でも、日本語の単語の意味は理解できるが、設問の意図を理解することが難しく、筆者が噛み砕いて説明をしなければならなかった。日本語の力以上に社会人生活を送ったことがない学生にとっては、社会人用に作られた設問を理解するのは簡単ではなかった。そこで、アルバイトや学園祭など身近な話題で課題設定をした。例えば、学園祭の出し物でリーダーが辞めてしまったとき、自分ならどのような行動をとるかなど考えてもらった。その結果から自分自身で自分がリーダータイプ、サポータータイプなのかを知るというものである。このワークショップは、身近な話題だったので参加者も具体的に考えることができたようだった。

次のステップとして、自分のやりたい仕事、将来の夢などを共有し、前のステップでおこなった分析と希望する仕事で求められるスキルや職場志向のギャップを考えるワークを行うこととした。学生の関心ごととしては、やはり卒業後の就職である。学生がやりたい

ことを発表した。発表内容に対して筆者とKが意見やアドバイスを言う、なにか就活塾のようになってしまった。

学生には、あらかじめプログラム参加時に、筆者もKも「先生」ではなく、ともにプログラムを考案し、実行するメンバーで、団体をいっしょにつくってほしいことを伝えていた。参加しながらプログラムの良い点改善点に関して率直に意見を出すような促しもした。しかし、ワークショップを行うにつれ、こちらが、大学生に教える、意見をいうという「先生」「生徒」の関係による就職塾のような場になってしまった。サポートする側とサポートされる側の一方通行の関係性に陥ってしまったのである。

## （2）活動の再検討

このようにワークショップを行ったものの、大学生から意見もせず活動が停滞してしまっただけでなく、もともと、このプロジェクトの目的は、参加者同士が学び合い、成長をお互いがサポートするコミュニティを作ることであった。その目的達成のためには、参加者が自ら考え行動をおこすことが必要である。しかし、上述のような膠着した縦の関係性では、若者中心の学び合うコミュニティを形成していくことは難しい。そこで、活動内容を再検討することにした。筆者は、原点に立ち戻り、やはり大学生が後輩をサポートする現場を経験してもらうことで、活動が前に進むのではと考えた。今持っている大学生の力を発揮できる場を作れば、責任感や使命感を果たし、達成感、自己効力感を得られ、主体的に活動に参加するようになるのではと仮定したのである。

2019年12月17日に「外国につながる高校生の進路ガイダンス」の共催団体である東京都国際教育研究協議会が「外国にルーツを持つ高校生の交流会<sup>6</sup>」を開催することを筆者は以前より知らされていた。この交流会が、大学生メンバーが活躍できる絶好の場ではないかと思うようになった。高校生のグループディスカッションにファシリテーターとして高校生のリード役を担うことで、大学生が、高校生のロールモデルとして、活動できるのではと考えたからだ。

前述のように筆者は当初大学生が、高校生をサポートするのはまだ難しいのではないかと考えていた。しかし、glo1abの活動に興味を示してくれた大学生であったら、高校生と向き合うことができるのではとその考えを改めるようになった。また、大学生が、このような場で力を発揮することで、外国にルーツを持つ若者の可能性や力が社会認識され、彼ら彼女自身も成長するのではないかとも思うようになった。そこで、主催団体のメンバーである高校教員に大学生をサポート役で参加できないか依頼をすると、すぐ快諾を得ることができた。また、ボランティアとしての参加ではなく謝金も用意してくださったので仕事として大学生は参加できることになった。

ガイダンスの大学生参加者はA、Cに加えBの3名である。当日は、紙飛行機のアイスブレイクの後、メインゲストとして矢野ディビッド氏の講演があった。講演の後、グループに分かれ、矢野氏の話の感想を共有した。このディスカッションに、大学生がファシリテーターとして参加した。大学生たちは、高校生が意見を引き出しやすい雰囲気を作ったり、意見をまとめたりといった活躍をみせてくれた。大学生Cは、同じアフリカ大陸にルーツを持つ若者として、日本人が持つアフリカのイメージやあまりに日本の若者が無知であることについて自分の意見を冷静に発信した。また大学生Aが、同じ国のルーツを持ち大学受験を目指している高校生から、進学相談をされ、アドバイスをしている場面も見られた。

この交流会の後、大学生側から、高校生に自分の体験を話し高校生の悩みを聞く会を開きたいという提案があったのも嬉しい驚きであった。これまで、筆者から提案したものに対して参加の意思表示をすることが多かったが、はじめて、自ら「やってみたい」という意思表示があったのである。

このように、大学生が受け身でワークショップに参加する活動より、現場に入って今もっている力を発揮するほうが、効果があがることをこのガイダンスで実感した。

### （3）外国につながる高校生のための大学生のよる相談会

#### ①開催まで

会を開催したいと申し出た大学生Aが、「ガイダンスで参加者の高校生に大学進学のアドバイスをした。きっと相談したい高校生はいるはず。大学受験を最近経験した私たちだからこそ、相談にのれる。大学に行かない子でも、日本語の勉強や高校生活の過ごし方など話ができる」と熱意を示し、具体的に企画を開始した。

そこで、Aがメインスピーカーとして、大学生Cがサブスピーカーとして役割を担うこととなった。Aからは来日した中学1年生から大学生となったこれまでの7年間で、直面した壁を話して、どう自分が行動したかを話すのはどうかという提案があった。筆者は、参加者が自分ごととして考えられるよう、まずAが直面した壁をはなし、参加者がAだったら、どのように行動をとるのか、考えさせるのはどうかと提案し、Aも同意した。

広報や場所取りは、筆者が担うこととし、Facebookや各支援者MLで広報をおこなった。また、場所は、駅近くの会議室を借りることとした。

#### ②当日の様子

参加者は教員1名と日本人高校生1名のみであったが、大学生の力を実感する場であった。筆者は最初に挨拶をした後、Aが進行役をつとめた。自己紹介のあと、Aが来日の経緯、

日本語で苦勞した中学生時代の話をした。来日する前は、勉強がよくできると自負があったが、日本語がまったくわからず、勉強にもついていけず、自分が何もできない人間であるかのように感じたという話をしてくれた。その後、英語には自信があり、英語のスピーチコンテストに参加し、都大会で優勝し、日本語の勉強にも力をいれ、自己肯定感を回復していく話は、外国にルーツを持つ若者だけではなく、日本の若者にも、胸に響く内容だった。Cからも「日本語ができないだけで、馬鹿だと思われたくない」という思いで日本語を勉強したことを語ってくれた。参加者の高校生からも、二人の頑張ってきた様子を実感したという言葉があがった。その後、「Aが、高校生のときに、アルバイトや、家族のこと、部活、スピーチコンテストとやるべきことがどんどん増え、マルチタスクになったとき、どうしたか、大切にした価値観は何か」という問いをたて、参加者の高校生に考えてもらう時間をとった。参加者が少なかったため、高校生からも比較的積極的に質問がでた。留学をしたいという夢を持っている日本人高校生からは、どのように複数の言語を習得していったかと熱心に聞く姿が印象的であった。

### ③課題

広報を SNS や ML を通じて行ったが、高校生 1 名のみとなってしまった。引率の教員からも、高校生をこのような場に引っ張ってくるのはなかなか難しい、教員が連れてくるしかないという意見をもらった。「ただ、とてもいい話だったので、もっと多くの高校生に話を聞いてもらいたい、高校の部活や授業の中で行ってはどうか」という提案があった。教員が一方的に指導するのではなく、同じ経験をした近い世代の大学生だからこそ高校生は耳を傾けるはずだと高い評価を得た。

#### （4）外国につながる高校生進路ガイダンス

3月17日に、「外国につながる高校生進路ガイダンス」を開催した。（主催：東京都国際教育研究協議会、共催：glolab、東京都公立高等学校定時制通信制教育研究会日本語非母語生徒教育研究グループ、東京都教育委員会人権教育研究奨励費研究グループ、多文化共生教育研究会、TEAMNET（多文化共生教育ネットワーク東京）<sup>7)</sup>）。このガイダンスに、当団体が共催団体として参加した。このイベントは①外国にルーツを持つ社会人のライフストーリーを聞きながら自分の未来を考えるワークショップ、②進学や就職など情報提供を中心としたセッション、③個別相談会という三部構成で実施された。glolabは、前半の①ワークショップの企画実施を担当した。

ワークショップのゲストスピーカーとして、ペルーにルーツを持ち、旅行会社の社員をしながらテレビなどで活躍している上村カルロス氏を招いた。大学生による高校生のための相談会のときに行ったように、上村氏が直面した課題を提示しその時にとった決断を高校生に考えてもらった。当団体の参加者は、筆者、K、大学生A、大学生Cである。まず、

Kが当団体の説明を行い、そこで大学生A、Cもユースリーダーとして紹介した。大学生をはじめて glolab のメンバーとし多くの人に発表できた素晴らしい機会となった。

そして、筆者がファシリテーターとして上村氏の話聞くかたちでワークショップを進行した。上村氏は、高校卒業後、工場での派遣社員、ホテルのウェイターをへて、現在は、旅行代理店で南米旅行のセールスをしている。キャリアチェンジをしたか背景など質問を投げ、高校生には、自身の考えをポストイットに書き、模造紙に貼ってもらった。大学生A、Cには、高校生の考えをまとめ、発表する役割を担ってもらった。AとCは、ただ高校生の意見を発表するのではなく、ユニークだと思う理由など感想も付け加えて全体に共有した。最後に、10年後の夢を高校生参加者がポストイットに書き込んだ。「自分でビジネスを起こしたい」「エンジニアになりたい」などさまざまな高校生の夢をAが発表をする形をとった。

当初ワークショップは、上村氏からの問いに高校生がグループディスカッションを行い、大学生2名は、ディスカッションのサポート役を担ってもらう予定だった。しかし、当日、会場の都合で狭いホールに変更となり、グループディスカッションが実施できなくなってしまった。そこで、上記のような形をとったのであるが、二人は短時間の打ち合わせだったにもかかわらず、感想もまじえて高校生の考えや夢を発表してくれた。

また、大学生をメンバーとして紹介した際に、ルーツを持つ国や話せる言語も紹介した。すると、フランス語しか話せない参加者がおり、大学生Cが急遽サポートに入った。また、大学生Aは、後半の個別相談では、センシティブな在留資格の相談の通訳も担った。これも急な依頼ではあったが、臨機応変に動いてくれ、改めて彼ら彼女らの力を実感することができた。

ガイダンス開催後のアンケートでは、高校生からは、カルロスさんの話に感動した、参考になったという声があり、教員からは、生徒指導の参考になったという声もあり概ね好評だった。また、通訳としてサポートにはいった大学生Cに感謝するという言葉もあったのが印象的であった。

一方で、ワークショップが時間的に長すぎる、進学希望なので大学の情報がほしかったという声もあった。進学希望の生徒たちにとって、進学という選択肢をとらなかった上村氏の話に共感を持てなかった可能性がある。これは、ファシリテーターである筆者の上村氏からの語りの引き出し方に課題があったと考えられる。高校進学後に焦点をあてて上村氏がとった行動の理由などを考えてもらったが、高校生にとって高校卒業後の社会を想像することは、簡単ではない。特に進学希望の大学生には、上村氏のストーリーは、自分には関係ない話だと思ったかもしれない。高校卒業後の社会人の話を中心に聞くのではなく、中学、高校時代にどのような壁に直面し、そのときどう考え、感じたかという内面につい

てより掘り下げた話を引き出すべきだった。高校生たちは同じような体験をすでにしているはずであるから、共通点を見出し、上村氏のその後のストーリーについて共感をもって聞けたはずだ。また、高校卒業後にどのような行動をとったかという問いを立てたが、むしろその行動の裏にある上村氏の考えについて問いを立てるべきだった。そうすれば、より深く高校生に考えさせることができたであろう。

進路決定時期がせまっている高校生にとっては、入試情報や奨学金など直接的な情報を得たいと考えるのも無理はない。ただ、ガイダンスは、1日のイベントであるため、すべての参加者が知りたい情報をすべて得ることは難しい。情報をただ与えるのではなく、高校生が自ら考え行動を起こすことがガイダンスの狙いのひとつである。そのことを鑑みれば、ガイダンス後にどう自分で知りたい情報を探すのか情報の得方を提供するプログラム内容へ変更する必要があると考える。

また、ガイダンス開催後、筆者、K、A、Cで振り返りを行ったが、A、Cからは、高校生同士の交流があれば高校生の意見をさらに引き出すことができたはずという感想があがった。上村氏がとった行動について複数の問いを立てて、都度考えてもらったが、スピーカーの話聞いて高校生が感想を共有するというやり方のほうが高校生の意見を引き出せたかもしれない。

## 6. 今後の活動について

### （1）2019年度の活動計画

前述のように、「外国にルーツを持つ高校生交流会」や「外国につながる高校生進路ガイダンス」で、大学生が高校生の身近なロールモデルとして、サポート役を担ったが、大学生が自らの経験を生かし活躍できる場をつくることで、彼ら彼女らが成長していく、大学生の力が社会的に認められていく過程を実感することができた。また、高校生には、一歩前をいく先輩の姿をみることで将来について考えるきっかけを提供できる可能性があることがわかった。今後は、これらの活動をプログラム化して、学び合い、共に成長をするコミュニティを作っていきたいと考えている。

当団体は、東京ボランティア市民活動センターの2019年度「ゆめ応援ファンド<sup>8</sup>」を受託した。2019年度はこのファンドを活動資金として、以下のプロジェクトを以下実施していく。本プロジェクトの構成員は①ユースメンバー（主に高校生）②ユースリーダー（主に大学生、専門学校生）③プロジェクトリーダー（社会人）④プロジェクトコーディネーター（筆者およびK）である。尚、プロジェクトリーダーは、ユースリーダーに伴走しな

がら、プロジェクト実施上や進路についての悩みなどに相談にのることを想定している。ただ、未だメンバーがいないため、当面プロジェクトコーディネーターが兼務する。プロジェクトコーディネーターは、都立高校や他団体との調整、プロジェクト全体のコーディネートを行う。

#### ①東京都立高校へのロールモデル派遣プログラム

外国籍生徒が多く通っている都立高校を中心に、ユースリーダーである大学生や専門学校生を派遣し、キャリア授業を実施する。本プログラムの目的は、①ユースリーダーがロールモデルとして、高校生にキャリア授業を実施しながら、自身も自己を振り返り、成長する、②高校生が高校卒業後の進路について考えるという2点である。高等学校の教員から日本人の高校生と同じキャリア授業では、自分ごととしてとらえられない生徒が多いと聞いた。高校生はユースリーダーから進路に対する考え方を学び、ユースリーダーは、高校生に語りながら自分を客観視し、学びを得ることを期待している。プログラムの実施方法としては、以下のような流れを考えている。

A. キャリア授業を実施前に、ユースリーダーとプロジェクトリーダーが話し合い、ユースリーダー自身がまず自己を振り返る場をつくる。また、どのような語りを行うか、ユースリーダーが中心となって考える。

B. 高校で実施するキャリアガイダンスの時間や日本語授業などの時間を使って、基本的に3回のキャリア授業を実施する。1回目は、ユースリーダーのこれまでの歩みについての語り、2回目は、高校生が自分の未来を考えるワークショップ、3回目は発表の場とする。

現在、本プログラムは、具体的に複数の高校から問い合わせがきており、まず1校目を5月から6月にかけて実施する計画だ。目標としては、初年度3校から4校に実施したいと考えている。

#### ②外国につながる高校生のための進路ガイダンス

引き続き共催団体として、ガイダンスの企画実施を行う。ユースリーダーがスピーカーとして参加し、これまでの体験を話し、高校生と対話を行う。ロールモデル派遣プログラムと内容が重複する部分もあるが、ガイダンスでは都内の高校全校に参加を呼びかけるため、より多くの高校生にリーチする。また、進路情報については、必要な情報を得る方法など、高校生がより自発的な行動をとれるようなプログラムを作っていく。

#### ③日本で育った外国にルーツを持つ人たちのライフストーリーの中心としたウェブメディア

ユースリーダーを中心として、日本で育った外国にルーツを持つ若者たちのストーリーをウェブメディアとして発信する。若者たちが、何を考えどう行動して今があるのか、そのストーリーをユースリーダーとの対話という形で語ってもらう。このプロジェクトの狙いは、以下3点である。

- A. ユースリーダーはインタビューの語りから学び自分の未来について考える、
- B. インタビューは、自己を振り返り、新たな気づきを得たり、将来について再度考えたりするきっかけとしてももらう。
- C. ウェブメディアで広く公開することで、未来について悩んでいる若者がロールモデルに出会う場とする

①ロールモデル派遣プログラム、②外国につながる高校生のための進路ガイダンスで出会った高校生の中から、ユースメンバーとして③ウェブメディアプロジェクトに参加を促していく。ユースメンバーはユースリーダーとともに活動をしながら、身近な先輩であるユースリーダーに気軽に相談したりユースリーダーから学んだりすることを期待している。

## （2）今後の課題

ここで、これまで活動を通して見えてきた課題を3点明らかにしたい。今後プロジェクトを進めていく上で、これらの課題に留意し活動を修正していくことが重要だからだ。

1点目は、参加メンバーの主体性である。前述のように活動開始直後、先生と生徒という縦の関係ができてしまったため、活動が膠着してしまった。「外国につながる高校生進路ガイダンス」などで、大学生の活躍の場を作り、彼ら彼女らの声に耳を傾けることで、筆者もKもおおいに学ぶことができた。今後、社会人であるプロジェクトリーダーが学生であるユースリーダーに接する時も、またユースリーダーがユースメンバーと共に活動するときも、この価値観は大切にしていきたいと思う。

2点目は、参加メンバーの拡大である。ユースリーダーとなる大学生、専門学校生に関しては、これまで筆者の前職でのつながりのなかで若者に声をかけてきたが、これには限界がある。glolabは、2019年4月に発足したTEAMNET（多文化共生教育ネットワーク東京）に参画している。このネットワークは外国にルーツを持つ高校生の支援に関心を持つNPO、教員、弁護士などから構成されている。今後はこのネットワークを通じて、ユースリーダー候補の若者とつながっていきたいと考えている。また、ユースメンバーについては、高校でのキャリア授業を実施しながらメンバーを増やしていければと考えている。一方で社会人であるプロジェクトリーダーに関しては、若者が集まって現場がまわりはじめたところ

る募集をかけていきたい。それまでは SNS など活動を報告しながら団体の認知度をあげていくことを考えている。

3点目は、多様な若者が集う場作りである。若者同志の繋がりを見ていると、同じ学校の同級生のグループや時に自身が属するエスニックコミュニティの友人同志であることが多い。当団体が作ろうとしているコミュニティはルーツ、年齢等多様な若者が集う場である。学校の枠、コミュニティの枠を超えて若者が共に活動したい、学びたいと思えるようなプロジェクトにしていく必要があるし、若者の胸に響くようなメッセージもだしていくことも大切だ。まずは上記のプロジェクトを実施しながらであるが、プロジェクトが若者にとって魅力あるものにしていくことを目指したい。

### （3）中長期計画

2020年度、2021年度も「ゆめ応援ファンド」の助成を継続受託する予定である。ただし、高校でのキャリア授業は、2019年度はパイロット事業として行い、2020年度以降は、高等学校で予算化してもらうよう働きかけていく。

外国につながる高校生進路ガイダンスについては、ユースリーダーの若者が中心となって実施していくことを目指す。これまで進路やキャリアに関する支援は、教員を中心とした大人の日本人が行ってきた。しかし、先輩インタビューや社会人からのフィードバックを得た若者が、高校生と同じ目線、視点をもちつつ自分の言葉で後輩に伝えることの影響力が大きいことは、これまでの活動を通じて強く感じている。高校生の悩みや心の内を理解することができ、高校生が気軽に心を開いて相談しやすいとも考える。自主企画によるガイダンスを通じて、高校生が進路を考えるきっかけづくりの場になると期待している。また、ガイダンスに限らずユースメンバーやユースリーダーが企画するプロジェクトを応援し、実施まで後押ししていきたい。

また、若者の進路についても活躍できる場を作っていきたいと考えている。実際に企業とのネットワークを構築し、上記活動のスポンサーを募りたい。企業には、活動にスポンサーとして参加しながら、外国にルーツを持つ若者の可能性を理解してもらおう。これまで、外国にルーツを持つ若者や元若者から就職で苦労したという話をよく聞いた。外国人人材の活用が叫ばれる昨今、状況は変わりつつあるかもしれないが、留学生ではない「日本で育った」外国にルーツを持つ若者の存在が知られているとは言い難い。glolabが企業とつながり、企業で働きたい若者と企業とをつなげる役目も担っていければと考えている。

## 7. おわりに

これまで、glolabが目指す若者のコミュニティは、外国にルーツをもつ若者を中心に考えてきた。果たしてそれでよいのか、今後考えていく必要があるかもしれない。経済的な問題など、さまざまな困難を抱えながら成長していく日本人の若者は、多く存在する。2018年度実施した「大学生による高校生のための進路相談会」の参加者は日本人の高校生だったが、その高校生にも外国にルーツを持つ大学生が語った体験と力強い言葉は、胸に響いたようであった。もし、日本人の若者も参画すれば、まさしく多様な若者が集う学びあい成長のするコミュニティに発展していく可能性はおおいにあるだろう。実際に取り組むか否かは、まだわからないが、外国にルーツを持つ若者特有の課題も向き合いつつ、日本人の若者も包摂するようなコミュニティの有り様を考察していきたいと思う。

## 参考文献

日本経済団体連合会(2018) 「2018年度 新卒採用に関するアンケート調査」 pp2

渡辺マルセロ (2011)「外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦 始-NPO 法人 Mixed Roots x ユース x ネット★こんぺいとうの実践報告ー」 pp49-pp50

---

<sup>1</sup> 外国につながる高校生進路ガイダンス

<https://www.facebook.com/events/551863225311453/>

<sup>2</sup> 法務省入国管理局 在留外国人統計 (2018)

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20180&month=12040606&tclass1=000001060399>

<sup>3</sup> 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 文部科学省 (2017)

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/06/1386753.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm)

<sup>4</sup> 文部科学省 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 平成30年度版 2019年度春ごろ公開予定

<sup>5</sup> 文部科学省 概算要求「外国人受入れ拡大に対応した日本語教育・外国人児童生徒等への教育の充実」30ページ

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/08/30/1408721\\_01-1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/08/30/1408721_01-1.pdf)

<sup>6</sup> 外国につながる高校生の交流会

<https://www.facebook.com/koukouseiguideance/photos/a.1503217319995381/1911946099122499/?type=3&theater>

<sup>7</sup> 2019年4月に発足した外国にルーツを持つ高校生の支援団体ネットワーク。（団体ホームページは今後作成予定）glolabは所属団体。

<sup>8</sup> ボランティア・市民活動総合基金「ゆめ応援ファンド」

<https://www.tvac.or.jp/news/50336>